影踏み遊び

とりっぴー野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
影踏み遊び

【Ｎコード】
Ｎ０７５２Ｏ

【作者名】
とりっぴー野郎

【あらすじ】
ある日友人と子供の頃によくやった
影踏み遊びをすることになった
その遊びの影の部分とは・・・

「龍夜、影踏み遊び覚えてる？」
「ああ、あれか、昔よくやったよな。」
「今度あれやらね？」
この頃ずっと接点の無かった海斗からのいきなりの誘いに戸惑ったが
どうせ暇だし放課後に影踏み遊びをすることにした。

影踏み遊びなんて何年ぶりだろうか。
小学生の時はよくやっていたが、中学に入って1回もやってない。

確か鬼ごっことルールはたいして変らないのだが
体をタッチするかわりに影を踏んだら鬼がかわる
ルールだっただろう。
でもなぜ今さら海斗はこの遊びに誘ってきたのだろう？
かすかな疑問が俺の脳を過ったが気にしないことにした。

放課後、俺がグラウンドに着いたときには
海斗等１０名が集まっていた。
「悪ぃ、ちょっと送れたわ。」
そういって俺がみんなの輪に入った途端じゃんけんが始まった。
「ちょ、まっ！！」
出しそびれてしまった俺が結局鬼となった。

俺が１０秒間目を瞑っている間に
みんなすっかり消えてしまった。
「んじゃ探すか。」

探しだした俺は同じクラスの片山をみつけた。

足遅いあいつなら捕まえられるかな・・・
そう思った俺の期待を裏切るように片山は
俊敏に逃げていく。
あの体格であれって（汗）

「龍夜意外と遅いな。」
人を小馬鹿にするように片山は言った。
「うっせー、ぜってぇ捕まえる。」
怒りを力に替え片山にせまっていく・・・
あと２メートル・・・

そのとき片山の影が消えた。
いや、正しくは中庭の校舎の影に隠れた。
影踏みのルールに「建物や木の影の中に入った影は踏む事ができない。」
というのがあったのをすっかり忘れていた。
「ただし影の中には１分以上いられず、影から出て５分間は影に入る事ができない。」
というルールもあったので俺は影の外で
１分待つ事にした。

こういう時の時間はやけに長く感じる・・・
そう考えているとまだ４０秒しかたってないのに
片山の足が動いた。
すかさず俺の足も動く。
遠ざかっていく片山の影を無我夢中で追いかけた。
あとちょい・・・
「潰れろー！」
そう叫び右足を思いきり前に出した。

「グシュッ！」
「えっ？」
俺が片山の頭の影を踏んだと同時に
何か柔らかいものを踏んだような音と感覚を覚えた。
俺は恐る恐る足を上げた。
が、視線の先には何もなかった。
「気のせいか・・・」

片山も自分の影が踏まれたところを見ていたらしく
素直にこっちにきた。
昔は踏まれたのに「踏まれてないし！証拠がないもん。」などと
言っていたものだ。

「やられたぜ、でも本当龍夜は記憶力ねぇな。」
「え、何が？」
「確か影踏む時に『潰れろ』って言ったらいけなかったんじゃなかった？」
片山にそう言われ微かな記憶が蘇った。
「悪い悪い、忘れてた。子供に汚い言葉を使わせない為にも
親達が勝手にルールをつけたしたんだったな」
「そうそう、後『潰れろ』って言われながら影を踏まれた人は
踏まれた場所を怪我するっていう都市伝説もあるしな。」
「ああ、そんなん噂もあったな。それで子供の時は本気で信じて誰
も言わなかったよな。」
そんな事をすっかり話し込んでしまい残りのやつらを忘れていた。
「んじゃそろそろ残りのヤツを探しに行こうか。もう帰る時間だろ。
」
俺が片山にそう言うと、片山は重い表情で話し始めた。

「それがよ・・・」

片山が話し終わると同時に
俺はひどいショックと、それ以上の怒りを覚えた。

片山の話だと海斗たちは始めから俺と遊ぶ気など
なかったらしい・・・
海斗の「鬼だけの鬼ごっこってどんなんだろうな？」
という一言から始まったらしいのだ。
いきなりじゃんけんを始め、俺を鬼にしたの事も仕組まれていた。
あいつらは影踏みが始まるとすぐに学校を出たらしい。
片山も最初はみんなと一緒に学校を出たらしいが
俺を心配して戻ってきてくれたらしい。
ずっと遊んでなかった海斗からの誘いを不思議に思ったが
これが目的だったなんて・・・

「でも、片山はそんな事を俺に言っていいのか！？」
「うん、あいつらのやる事はちょっと度が過ぎてると前々から思っ
てたんだ。
龍夜もあいつの事は気にしないでいいから。」

その言葉に俺の心の傷も少しは癒えた。
こいつはあいつ等と違う。
明日からはこいつを親友と呼ぼう。

でも片山に明日はなかった・・・。

次の日先生から聞かされた突然の言葉。
「片山君は昨日亡くなりました・・・。」
先生の流す涙が冗談ではなく真実だということを告げていた。

それでも信じられなかった。
自分の耳を疑った。

それから学校は片山の死の話題でいっぱいだった。
変な噂まで流れ出した。
片山は殺されたらしい・・・
片山は殺された時、顔が誰だか分からない程にぐちゃぐちゃだった・・・

その噂を聞いたとき、俺は昨日の感覚が蘇った。
片山の影を俺の右足が踏んだ時の、あの感覚を・・・。

「まさか・・・な。」
俺はそう呟き、頭の中の勝手な想像を振り払った。
どう考えても現実におこるわけがない。
でもそう考えれば考える程勝手な想像が膨らむ。
自分でもアホらしく思えたが確かめてみたくなった。
昨日できた親友を俺が昨日殺したなんて思いたくなかった。
それを裏付けるためにも確かめたいという気持ちはどんどん大きくなっていった。

誰を使って試すかはそんなに考える必要もなかった。
というよりあいつ意外に考えられなかった。

次の日の放課後、海斗を中庭に呼びだした。
一昨日の事もあったので警戒しつつ海斗は来た。
「何か用？」
一昨日の事を聞かれると思っているのか
海斗の緊張が目に見える。
「うん、大アリだよ。」

次の瞬間「潰れろ！！」の叫びとともに
俺の右足が海斗の顔の影に振りおろされた。
海斗は「はずしたな、カス。」と満足気に言いその場から逃げるように消えた。

「いや、外してねぇよ。」
右足にはあの感覚がまだ残っていた。
これで俺が片山を殺したということになるにも関わらず
それ以上の満足感が俺の心を満たした。
自然に笑みがこぼれた・・・

次の日の朝、予想していた通りの話が先生からあった。
学校側もさすがに混乱しているようだ。
この学校の生徒を狙った連続殺人事件が起きていると
校長からの話であった。

これで確実だ。
この力があれば・・・。

7年後、俺は若くにして大手会社の社長までになっていた。
ライバル会社の社長の謎の死。
社長が次々に消え、落ちていくライバル会社。

薔薇色の人生を送っていた俺に無いものは無かった。
金、酒、名誉、女。
女というのは美人の秘書のことで
その美貌に一瞬で魅かれた。
欠点などなさそうな彼女も
どうも虫だけは嫌いらしい。

今日のデート中にも彼女の足元にバッタが出ただけで
彼女の驚きようといったら凄かった。
ここはかっこいいところを見せてやるか。
「俺の女に近寄んなよ。潰れろ。」
そう言ってバッタを潰そうと右足が動く。
いや正確には、彼女の影の上にいるバッタを潰そうと右足が動く。

気付いた時にはもう遅かった・・・
バッタを潰したとは思えない音と感覚。

その日の夜、最愛の彼女は死んだ・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0752o/

影踏み遊び

2010年10月9日11時25分発行